黙示録11章7節 「世間と真逆になっても」

1A 偽りの神殿
1B 異邦人の外庭
2B ソドムと呼ばれる神の都
2A 二人の証人
1B 神殿の再建
2B 油の子たち
3B 神の恵み
3A 主こそ神
1B 来るべきエリヤ
1C バアルを拝む民
2C 脱「多勢に無勢」
3C 必ず受け継ぐ次世代
2B 預言者モーセ
1C 自分を神とする高ぶり
2C 神々への裁き
3C 民の解放
4A 使命の時
1B 「わたしの時」
2B 共におられる方
3B 世を去る時

本文

黙示録 11 章を開いてください。先週、昨年は黙示録 10 章を見ました。本日、午後の礼拝で 11 章を一節ずつ見ていきたいですが、今朝は、7 節をお読みしたいと思います。「二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」11 章における、中心人物は、二人の証人です。世界中の人々に嫌がられ、憎まれる預言者たちですが、主の証しを忠実に行い、最後は殺され、またよみがえるという話になっています。

みなさんが少し長く、人生を生きていると、以前は当たり前にされていたことが、今ではとんでもない非常識になっていることがあると思います。昭和時代のテレビ番組など、例えば、志村けんと加藤茶が、ビーチで黒人女性がいると、醜い女性の一人として嫌悪感を露わにする場面を見たことがありました。今、こんなコントがあれば、人種差別で訴えられてしまいます。セクハラもそうですし、喫煙もそうでしょう。かつては病院でも平気で吸っていましたし。

こうした改革は、良いことだと思います。けれども、その逆もあります。かつては、あまりにも当たり前で誰も疑問視することのなかったことで、今は、非常に悪いことにされてしまうことがありますね。例えば、男女が結婚して、子を産むことです。男女の結婚を教会がお祝いして、そして子どもが生まれることを期待すること、これのどこが悪いのでしょうか？むしろ、創世記の初めに、神が祝福されることとして書いてあります。ところが、少数の独身者や性的少数派、また不妊の夫婦への差別だとして、お祝いしないという意見が教会の中にさえ、あるのです。

聖書には、神がこうであると言われていることが数多くあります。それを義と呼び、神ご自身が義なる方です。ところが、それを悪とする時代が忌まわしいこととして、イザヤが預言しました。「5:20 わざわいだ。悪を善、善を悪と言う者たち。彼らは闇を光、光を闇とし、苦みを甘み、甘みを苦みとする。」ですから、悪を悪という時、また善を善だと言い続ける時に、角が立ちます。いや、角が立つどころか、変人、奇人に思われます。そして、社会的な制裁、法的な制裁を受けることさえ覚悟しなければいけないこともあるでしょう。

1A 偽りの神殿

こうしたことが、二人の証人が預言して人々に憎まれる背景にありました。

1B 異邦人の外庭

黙示録 11 章は、将来に飛びます。将来、エルサレムに神殿が再建されます。今、神殿の丘には、イスラム教の岩のドームがありますが、そこに何らかの政治的妥協があって、神殿の外庭は異教徒に明け渡されたままで、隣接するようにして神殿が建て直される時が来ます。ダニエルが預言をして、荒らす忌まわしい者、獣とも、反キリストとも呼ばれる者が、神殿について、エルサレムについて、ユダヤ人の多くの者と堅い契約を結ぶことを教えています。

2B ソドムと呼ばれる神の都

それで、ユダヤ人たちは、自分たちは神に近づくことができたと喜ぶことでしょう。神殿が、紀元 70 年、ローマによって滅ぼされてから一度も、建てられたことはないからです。けれども、物理的に神殿が建てられても、霊的にはまるで建て直されていないエルサレムの姿があります。11 章 8 節後半には、「その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。」とあります。エルサレムが、ソドムとかエジプトとか呼ばれているのです。つまり、罪を犯して、神にまで届くようなソドムと、世の富と栄光に満ちていたエジプトと何ら変わらないのだ、ということです。

イザヤは預言で、このことを警告しました。「66:1-2 【主】はこう言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたがわたしのために建てる家は、いったいどこにあるのか。わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。2 これらすべては、わたしの手が造った。それで、これらす

べては存在するのだ。――【主】のことば――わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」私たちキリスト者も、教会生活において、それらしく表向き、宗教的な行動は取れます。きちんと聖書を読んだり、祈ったり、奉仕ができます。けれども、それがそのまま、みことばを真剣に聞いて、それを実行することにはなりません。むしろ、表向きの熱心さを、みことばへの不従順を覆い隠すためにさえ用いてしまいます。

2A　二人の証人

それで、主は二人の証人を立てられるのです。彼らのしていることは間違いだ、罪を犯していると明らかにする証人です。11 章 4 節に、「彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。」とあります。

1B　神殿の再建

これは、ゼカリヤ書 4 章にある幻からです。そこには、幕屋や神殿に光を灯す、燭台の幻があります。燭台は七つの枝が出ており、その先にはともしび皿があります。そこに、祭司が火が消えないように、いつも油を注ぎます。ところが、この幻では、背後に二本のオリーブの木があります。そこからそれぞれ管が出ていて、七つのともしび皿に、そのままオリーブ油が流れているのです。

そして、この意味を御使いが解き明かします。「4:6-7 これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。7 大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前で平らにされる。彼がかしら石を運び出せば、『恵みあれ。これに恵みあれ』と叫び声があがる。」ゼルバベルは、バビロンからエルサレムに帰還したユダヤ人たちの指導者です。もう一人指導者がいます。大祭司ヨシュアです。ゼルバベルとヨシュアが、この神殿再建の工事を指揮していましたが、周囲の住民の阻止活動に遭いました。それで工事が中断していました。しかし、預言者ハガイとゼカリヤが彼らを警告し、また励ましました。それで彼らは、工事を再開したのです。次は反対があっても、彼らはやり続けました。

けれども、その工事は、途方もないものでした。瓦礫が山となって積み上がっていました。そのような困難を抱えていたゼルバベルに、主は励ましの預言をゼカリヤによってくださったのです。オリーブの木からの油は、主ご自身の霊を示していました。ゼルバベルは、周囲からは軍事的な圧力がかけられていました。それが「権力」と訳されている部分です。軍事力と訳してもいいところです。そして、能力については政治力ですね。しかし、軍事力でもなく、政治力でもなく、ただ主の霊によって、この事業は成し遂げられるという励ましです。そしてゼルバベルは喜ぶのです。山のように立ちはだかっていた困難と障壁は、主の恵みによって、平らにされていることを喜んでいます。

2B　油の子たち

そして、このように聖霊による、特別な油注ぎが二人にあって、それで神殿が建てられることにつ

いて、彼らを主は「油の子」と呼んでいます。ゼカリヤ 4 章 14 節に、こうあります。「これらは、全地の主のそばに立つ、二人の油注がれた者だ。」「油注がれた者」の直訳は「油の子たち」です。

3B 神の恵み

どんなに悪がはびこっていても、それによって主のみこころを行うのが困難であっても、主の恵みがあるのだということを示しています。詩篇の交読文を思い出してください。52 篇を朗読しましたが、それはダビデがサウルに追われて、彼が祭司のところにいるのを、エドム人ドエグに見られてしまった時に歌ったものです。その結果、祭司の家のうち、一人を除いてサウルが殺しました。サウルの家臣は、主に油注がれた祭司に手を出せませんでしたが、エドム人ドエグは、良心の呵責を覚えず殺したのです。

しかしダビデは、この悪者はすぐに滅びることを確信しました。そして、こう歌います。「詩 52:8 しかし私は神の家に生い茂るオリーブの木。私は世々限りなく神の恵みに拠り頼む。」どんなに悪がはびこっていようと、どんなに困難があろうと、私はずっと神の恵みに拠り頼むと、信仰をもって決断しているのです。そして、事実、ダビデの生涯には神の恵みが広がっていきました。彼が油注がれ、聖霊の働きによって、神の恵みは人々に、そしてイスラエルの王国全体に広がりました。私たちも、どんな悪があっても、恵みに拠り頼む時に、主が恵みによって支配されます。

3A 主こそ神

これが、二人の証人の背景です。彼らの働きによって、ソドムやエジプトのような霊的状態になっていたエルサレムで、後で人々が神をあがめるようになります。

では、次に彼らの働きを見ます。すごい勢いです。「11:5-6 もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。6 この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。」

この預言の働きは、エリヤとモーセを思います。火が出て敵を焼き尽くすのは、エリヤを捕まえに来た、王から遣わされた者たちが火で焼き殺された（Ⅱ列王 1 章）のを思い出します。そして、雨が降らないようにするのは、アハブ王に預言して、その通りになりましたね。そして、水を血に変えるのは、モーセがナイル川に預言をして、それが血に変わりました。エリヤとモーセの証しの姿勢を見ていきましょう。

1B 来るべきエリヤ

エリヤの名前は、「主こそ神」であります。主こそ神であることは、イスラエルの民には、信仰の支

柱であります。

1C バアルを拝む民

けれども時は、アハブ王が、シドンにあるバアルを持ち込んで、イスラエル人たちがバアルを拝んでいた時です。主の預言者たちはわずかしかいません。けれども、「主こそ神」という、あまりにも明らかで、単純なことを、そのまま語った預言者であります。彼は、ことさらに挑みかかって、「おまえたち、主が神なのだ」と言ったのではありません。むしろ、王とイスラエルの国がみな、バアルに傾いたので、そのまま、「こちらが正しいでしょ」として、宣言したにすぎません。

証しというのは、こういうことを指します。キリストが主であることは、いわば自明です。そのまま真理であり、すべてはこの方によって造られ、支配されており、この方に至ります。ですから、何かそう信じない人々に押し付けることではないのです。むしろ、どんなに違うと思っていたり、感じていたりする人がいても、それでも、「だって、キリストは主ですから」というのが、証しなのです。証言ですから、「それが事実なんだ」と、見たこと、聞いたことを言い表すだけなのです。相手は圧しつけていると感じるでしょうが、真理と正義を抑えつけているのは、相手のほうなのです。

2C 脱「多勢に無勢」

そして、証人は、大多数の人々は左を向いていても、それでも右を向いているような存在です。ここの二人の証人が、全世界の人々に憎まれているのですが、それでもまっすぐに生きました。エリヤも、自分しか主の預言者はいないと思っていて、他にもいたのにたった一人だと思っていましたが、それでも、バアルの預言者たちに対峙しました。「Ⅰ列王 18:22 私一人が【主】の預言者として残っている。バアルの預言者は四百五十人だ。」私たちは、「多勢に無勢」という考えから脱しないといけないのです。

3C 必ず受け継ぐ次世代

そして彼が、証しを続けていると、彼についてくる人がいました。エリシャです。主は、エリシャの強い願いとおりに、エリヤの霊の二倍の分け前をもらいました。エリヤの行った奇跡の、まさに二倍の奇跡としるしを行いました。こうやって、エリヤの証しは後継者によって受け継がれ、ますますその証しが広がっていったのです。

2B 預言者モーセ

では、次にモーセの証しについて思い出しましょう。

1C 自分を神とする高ぶり

モーセとアロンが、ファラオに行った時、ファラオは、「出エ 5:2 主とは何者だ。私がその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならないとは。私は主を知らない。イスラエルは去らせない。」主

とは何者だ、から始まりました。結論からいうと、ファラオの心には高ぶりがありました。自分の上に、王なる神がいてはならないのです。彼自身がファラオ、神であるとみなしていたからです。それで、彼の心は強情になり、直しようのない状態でした。

このように、証しを立てるとは、その証しに触れた人が、自分が自分を神とみなしている高ぶりをあらわにされます。自分の心に、自分自身が王座に着いていることをが、露わにされます。それで、つよく、主が神であることの証しを拒むのです。

2C 神々への裁き

そこで、主は、ファラオが頼りにしている一つ一つのものを、崩されます。それぞれが神々として拝まれていたものです。ナイル川も拝まれていましたが、それを血に変えました。かえるも拝まれていました。地面も神でしたし、牛も神でした。一つ一つ、災いを下しました。このようにして、主の証しを立てると、それを聞いた人々が頼りにしているものが、頼りにならないことを明かしていくことになります。

3C 民の解放

そしてモーセの証しは、最終的に、民を解放することになります。ファラオの力を弱くさせ、ご自分の民を連れ出すことになるのです。多くの人が滅んでも、主がご自分のものを救う力を、証しはもたらすのです。「Ⅱコリ 2:15-16 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。」

4A 使命の時

そこで本文に戻りましょう。二人の証人に対して害を加えることができなかったのに、11 章 7 節では、彼らが殺されてしまうのです。しかしそこには、条件がありました。「二人が証言を終えると」とあります。つまり、彼らに与えられた証しの使命が果たされたら、殺されたのです。言い換えれば、使命を果たす時が来るまでは、守られるということです。

主のみこころを行った人々でも、災いを受けたり、死んだりします。殺されたり、殉教したりすることさえあります。ピリピの人たちに、ローマで皇帝の判決を待っているパウロが語った言葉を思い出しましょう。「ピリ 1:23-24 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。」彼は、福音を伝えて、ピリピの人々の信仰を建て上げていくという使命がありました。皇帝によって死刑判決が出て、殺されたほうが、はるかに望ましいと思っていました。それは、主とともにいることを意味していたからです。け

れども、肉体にとどまることが必要だという使命を抱いていたのです。

1B 「わたしの時」

主イエスご自身が、定められた時を意識しておられたのをご存知でしょうか？ヨハネの福音書には、「わたしの時」という言葉が何度となく、出てきます。初めのしるしであった、カナでの婚礼で、主が母マリアに言いました。「2:4 女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」7 章では、肉の兄弟たちに「わたしの時はまだ来ていない。」と言われました。そして、エルサレムで仮庵の祭りの時に捕えられる危険があったのですが、「7:30 だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」とあります。

けれども、「時は来た」と言われた時がありました。エルサレムに入城された後です。「12:23 人の子が栄光を受ける時が来ました。」「12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」そう、その時は十字架につけられる時です。その時が来るまでは、主はご自身がキリストであることを公にしませんでした。しかしここで公にして、それで十字架につけられるのです。こうやって、使命を果たすためには、神はこの方を守り、使命が来た時には、死に渡されたのです。

2B 共におられる方

主は、私たちがみこころを行う時に、必ずともにいてくださいます。マタイの福音書の最後のイエスのことばは、こうです。「28:20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

そして、使徒パウロは、使徒の働きには、何度となく殺されかけました。けれども、主がともにいたことを教えています。エルサレムで暴動が起こった時には、こう書かれています。「使 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。」そして、ローマまで囚人たちが船で連れて行かれましたが、暴風に遭いました。その時も、主がともにいたことを、乗っている人々に伝えました。そして、マルタ島に漂流しましたが、そこで毒蛇にかまれても、害を受けませんでした。マルコの福音書で主が、福音を宣教する者たちに約束された通りです。「16:18 その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」

3B 世を去る時

しかし、そのパウロが、二回目の皇帝ネロの前に立つ時は、殺されます。その直前に書いたのが、テモテへの第二の手紙です。彼は、世を去る時が来たとして、定められた時について語っているのです。「4:6-8 私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。7 私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。8 あとは、義の栄冠が私

のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」

こうして、主は、私たちが証しをするように召しておられます。そのみこころを行っている時は、必ず主はともにおられます。いろいろなことが起こっても、必ず救い出してくださいます。しかし、それはその使命を果たす時までであり、人生における使命を果たせば、時が来れば世を去るのです。

逆に言えば、私たちは、自分に与えられた使命、召しを知っているか？ということです。そして、それには時があるということです。その時をつかみ取って、賢く、最大限に使っているか？ということです。ペルシアの王妃エステルに、モルデカイが言った言葉を思い出しましょう。「4:14b あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」ユダヤ人を滅ぼす者の手から救い出すために、ペリシアの王の妻になったのかもしれないと、モルデカイが言ったのです。私たちも、主のみこころによって今の自分がいるのです。その召しの中に生き、そして、召しの中に生きている時、主は共におられます。